

踏切に関する民俗文化

——「魔の踏切」と踏切の地蔵を事例として——

劉 昌 赫

LIU Changhe

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】 本研究は歴史民俗学の観点から「魔の踏切」という言葉を調査して、民衆がいつから踏切の交通安全を日常生活に影響を与える社会問題として認識し始めたかを明らかにする。法律や公式文書に比べて、これらの資料は強い感情を持っており、恐怖や不安の感情から民衆の憂慮を発見することができる。

日常生活に影響を与える社会問題に直面した民衆は、何らかの解決方法を持っている。その解決方法の一つが、いくつかの踏切のそばに立つ地蔵である。本研究では、各地の市役所、区役所、図書館、民俗資料館の協力を得て、地蔵の文献資料を収集し、同時に地蔵の建立者や管理者と連絡を取り、聞き取り調査を行った。フィールドワークから、これらの地蔵は異なる名前を持っているものの、同じ機能を持っていることが分かった。これらの機能には、地蔵が本来持っている機能である死者の慰霊供養と、民衆が付加した、時代に応じた現世利益である事故防止、さらに石造物としてのモノの役割が含まれている。これらの地蔵は、日本の民俗文化において代々伝わる経験を表し時代と人々の需要に応じて変化し、問題を解決する民俗文化を形成している。

以上の分析を通じて、本研究は鉄道事故という技術的側面だけでなく、民俗文化の中にもこの問題に対する独特の解釈が存在していることを示している。技術的な安全対策と並行して、民俗文化を通じて鉄道事故に対する人々の認識や対処方法が形成されている。また、鉄道事故に関連する民俗文化は、日本人が直面している社会問題に対して、以前の経験と現代の社会文化の背景を組み合わせ、問題を解釈または解決する手段や方法を見つけるという点で、現代民俗学の観点から見て重要な意味を持っていると考えられている。

キーワード：魔の踏切・踏切地蔵・社会問題から生まれた民俗

Folk Culture Related to Railroad Crossings: The Case of 'Demon Crossings' and Jizo Statues at Crossings

Abstract : This study investigates the term “demon crossings” from a historical folklore perspective to clarify when the public began to recognize the traffic safety of railroad crossings as a social problem affecting daily life. Compared to laws and official documents, these materials carry strong emotions, allowing us to discover the public's concerns through feelings of fear and anxiety.

Faced with social problems affecting daily life, the public has some solutions. One such solution is the Jizo statues placed near some crossings. This research collected documentary materials on Jizo with the cooperation of city offices, ward offices, libraries, and folklore museums, and also

conducted interviews with the creators and managers of the Jizo. Fieldwork revealed that these Jizo, although having different names, share the same functions. These functions include the original function of Jizo, which is the memorial service for the deceased, accident prevention which the public has added depending on the era, and the role of the stone objects themselves. These Jizo represent experiences passed down through generations in Japanese folklore, changing according to the times and people's needs, and forming a folk culture that solves problems.

Through this analysis, the study not only focuses on the technical aspect of railway accidents but also shows that there is a unique interpretation of this issue within folk culture. Parallel to technical safety measures, people's perceptions and ways of dealing with railway accidents are formed through folk culture. Furthermore, the folk culture related to railway accidents is considered to have significant importance from a contemporary folklore perspective, as it shows how the Japanese combine past experiences with the contemporary socio-cultural background to find ways and means to interpret or solve social problems they face.

Keywords : Demon Crossings, Railroad Crossing Jizo, Folklore Arising from Social Issues

はじめに

鉄道は日本の近代化過程において重要な役割を果たしているが、同時に交通安全問題も引き起こしている。特に踏切事故は、多くの死傷者を出している。日本政府は踏切の安全向上に努力をした。例えば、「踏切道改良促進法」は1961年に制定され、大規模な踏切改造や廃止は70年代の交通戦争時期に行われた。ただし、踏切事故は完全には解消されていない。この問題は長期にわたり社会問題として存在し続けている。一方、民衆にとって踏切交通安全問題は、本当に戦後から社会問題として真剣に捉えられるようになったのだろうかという疑問が残る。もし民衆が踏切安全を自分たちの生活に影響を与える社会問題として捉える場合、彼らはどのような方法でこの問題を解決しようとするのだろうか？ この疑問を解決するためには、民衆の視点から出発する必要があるが、では、どのような資料が民衆の感情や思考を代表するものとなり得るのだろうか？

踏切事故に関するニュースに注意を払っていれば、「魔の踏切」という言葉を目にすることがあるだろう。この言葉は一般に、その踏切で事故が頻繁に発生することを表現するために用いられる。一方、「魔の踏切」は踏切に関連する怪談の中でも頻繁に登場する。1920年から新聞紙で流行し始めた踏切怪談や、最近流行している踏切の心霊スポット探検などは、踏切怪談が長い歴史を持っていることを示している。ただ、現在の怪談研究において、踏切怪談は十分に位置付けられていない。また、踏切は鉄道関連設備の一部として、踏切怪談は基本的に鉄道怪談の様々な要素と組み合わせられている。

例えば、田中貢太郎（2017：340）は「妖女の舞踏する踏切」という怪談に「魔の踏切」が見える：

品川駅の近くに魔の踏切と云われている踏切がある。数年前、列車がその踏切にさしかかったところで、一方の闇から一人の青年がふらふらと線路の中へ入って来た。機関手は驚いて急停車してその青年を叱りつけた。

「前途のある青年が、何故そんなつまらんことをする」

すると、青年ははじめて夢から醒めたようになって、きょろきょろと四辺を見まわしながら云

った……

「魔の踏切」という言葉が最初に出現した時期については、現在では特定することが非常に難しい。管見の限りで利用可能な資料を基にした最古の記録は、1918年に朝日新聞5月25日東京朝刊で掲載された記事である。その記事は「碑文谷の法要」と題されており、以下のように記述されている：

魔の踏切——近く三人の血汐を深く吸ひ込んだ碑文谷踏切の前に蜿る幾條の鐵路は、ここに死んだ痛ましい人達の怨念に冷やかに光つて居る、曇低く広がつて秋のやうな風ひやりを二十四日の朝は踏切番の打振る小旗も寒けにはためいて居た……

この記事中の碑文谷踏切は「魔の踏切」と呼ばれ、この踏切は既に3人の死者を出している。一方、「魔の踏切」という言葉はどのような意味があるだろうか、また、そもそも「魔」という言葉が具体的に何を指しているのか。明治期に流行した「偽汽車」⁽¹⁾や、大正期の「踏切の死神」⁽²⁾など鉄道怪談による、事故発生の原因は以前轢死した狐や狸などの動物の仕業とされていたが、後には轢死した人々の怨霊の仕業とされるように変わったことが分かる。したがって、ここで言及されている「魔」は、これらの動物や怨霊を指している可能性がある。朝日新聞の記事に怪談と同じく「魔」は轢死者の怨念を指しているかもしれないが、『日本国語大辞典』⁽³⁾では、「魔」は以下のように様々に異なった定義がある：

1. 仏語。人の善事を妨げる悪神。特に欲界第六天の魔王。転じて、悟りのさまたげとなる煩惱などのさわりをいう。
2. 人を殺したり、人心を悩ませたりする悪霊。悪魔。魔物。
3. 江戸時代、多く、天狗をさしていう。
4. 人の命を奪うような恐ろしいもの、恐るべきもの。不思議なもの。神秘的なもの。「魔の海」

上記のうち第四点の解釈は、「魔の踏切」という言葉の誕生に関連している。ここで言及されている「人の命を奪うような恐ろしいもの、恐るべきもの」とは、「魔の踏切」以外にも様々な場所で利用されている。例えば、自殺が頻繁に起こる森林は「魔の樹海」、事故が多発する高速道路は「魔の道」と称される。そして、「魔の踏切」も同様に、事故が頻繁に起こる踏切への呼称である。もう一つは、この解釈の後には、「不思議なもの、神秘的なもの」と書かれている。つまり、この踏切の空間にはある神秘性や恐怖性が存在する。例えば、読売新聞1932年11月13日付の「魔の踏切で惨死」という記事では、踏切の記述が以下のようにされている：

……同じ踏切は電車の見透かし悪く魔の踏切として怖れられてある

この記事は、事故発生の原因が踏切の視界不良により、電車や歩行者が互いを認識できなかったことにあると指摘している。そして最後に、この場所は魔の踏切と呼ばれ、「怖れられてある」と記述されている。

これは上述の怪談と新聞が呼応した、つまり「魔の踏切」という言葉が使われる時、人々はその踏切に対して実際に恐怖や不安を感じていることを示している。したがって、新聞データベースで「魔の踏切」という言葉を検索することにより、人々の踏切の交通安全に対する認識を探る一つの方法を提供している。

一点注目すべきことがあるのは、「魔の踏切」という言葉は大衆メディアや怪談など民衆の物語のみに存在し、公式の官庁文書では「開かずの踏切」と呼ばれている。例えば国土交通省の用語集に、⁽⁴⁾「開かずの踏切」は存在しているが、「魔の踏切」という言葉はない。これは官庁文書の厳肅さに関連している可能性があり、「魔の踏切」を使用することにはある種の曖昧性があるかもしれないが、一方で、「魔の踏切」という言葉自体が、民衆の専門用語と見なすことができ、それは民衆が踏切に対して持っている最も真実の感情から生まれたものである。つまり、この言葉を使えば、踏切の交通安全問題が民衆にとって深刻な社会問題であると民衆が認識していることを示している。

I 異常死と対応法

波平恵美子が指摘したように、これらの異常死に遭遇した死者は強い不浄性を帯びており、その不浄性を減少させるためには特別な儀式や方法が必要である。これにより、死者の魂が慰められると共に、遺族や関係者自身も安心感を得ることができる（波平 2006：355-362）。これらの特別な儀式や方法は過去に限らず、現代に至るまで異常死者を慰めるために使用され続けている。特に近現代に発生した以前はあり得なかった大規模な事故において、これらの儀式や方法の使用が頻繁に見られる。

これらの大規模な事故の犠牲者は、異常死と見なされ、これらの異常死に対しては特別な方法で慰霊する必要がある。例えば、1985年に発生した日本航空123便墜落事故では、520名の乗客及び乗務員が死亡した。これらの犠牲者に対し、地元住民、遺族、政府は様々な慰霊儀式を行っている。事故現場に建立された御巣鷹山慰霊碑、追悼施設である慰霊の園、遺族や登山追悼者による慰霊登山、あるいは自発的に建立した観音像など、これらは全てこの事故による異常死に対する対応法である。

「魔の踏切」から見ると、踏切事故が社会問題として、人々に非常に大きな不安を引き起こしていることが分かる。同時に、踏切事故による犠牲者は異常死者に分類される。そのため、これらの異常死者は必ずある特別な儀式や方法で慰霊される。また、人々はこれらの社会問題に直面する際、それが自分たちの生活に影響を与えることを完全に放任するわけではない。では、事故死者の慰霊を行い、かつ民衆の不安を解消することができる方法はあるのだろうか？ この点について、筆者は頻繁に事故が発生する踏切のそばに建立される踏切地蔵を例に挙げ、民衆が問題を解決する方法を説明できると考えている。

II 踏切の地蔵とは

まず、本研究が調査した踏切地蔵、あるいは正確に言うと「踏切の地蔵」とは、筆者が地理的位置に基づいて行った「簡単」な分類である。この分類は、踏切の隣に建立された地蔵を踏切の地蔵というカテゴリに分類するものだ。これらの地蔵には様々な名前があり、著者の調査によると、直接「踏

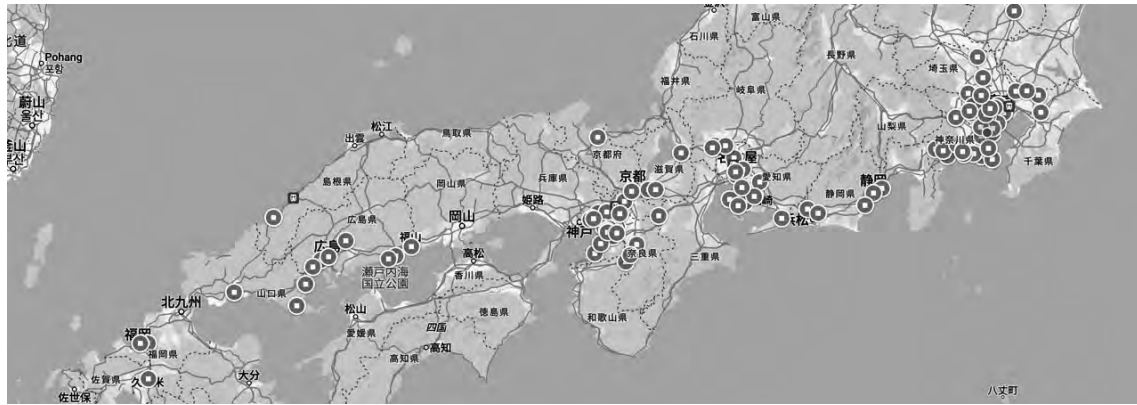


図1 踏切地蔵の位置 丸点は踏切地蔵の所在地 Google Map を基に筆者作成

切地蔵」と呼ばれるものや、所在する町名を前に付けた「霜田踏切地蔵」などがある。また、「延命地蔵」、「交通安全地蔵」、「安全地蔵」と命名された地蔵の数も多い。次いで、「魔除け」や「厄除け」の地蔵があり、その他多くの地蔵の正式な呼称はまだ明らかでない。しかし、地元住民に聞き取り調査を行った際、住民たちはこれらの地蔵を基本的に「踏切地蔵」と呼んでいる。

この踏切の地蔵は日本全国各地に存在している（図1）。この図に示されている地蔵は、全ての踏切地蔵を網羅しているわけではなく、詳細は本研究の付録にまとめている。この図からは、踏切地蔵が太平洋側に集中しており、特に東京や大阪のような大都市に多く存在していることが分かる。もちろん、これは大都市における鉄道路線の多さ、人口の多さ、交通の複雑さと関連がある。一方、日本海側では踏切地蔵の数が比較的少なく、内陸部ではさらに稀である。しかし、時代が古いこと、資料の欠如、内陸地域の調査が少ないことから、かなりの数の踏切地蔵がまだ発見されていない可能性がある。

踏切地蔵の歴史について、筆者が調査した資料によると、踏切地蔵は最も早いもので1905年に出現したとされ、その地蔵は京都府舞鶴市に所在する「森踏切地蔵」である。この地蔵は舞鶴市で鉄道が開通した翌年に、地元の子供たちの安全を守るために建立された。また、多くの踏切地蔵は年月が経過して資料が不足し、あるいは撤去されたため、現在では他にもっと古い年代に存在したかどうかを確定することはできない。とはいえ、森踏切地蔵が鉄道開設後わずか一年で建立されたことから、実際にはそれ以前に踏切地蔵が存在していた可能性が推測される。

しかし、もし森踏切地蔵が最初の踏切地蔵であるならば、踏切という空間の出現と地蔵の建立の間には約30年の空白期間が存在する。鉄道が開通した当初は、路線数が少なく列車の速度も遅いため、踏切事故は後の時代のように頻発していなかった。現在知られている最古の踏切事故は1879年のものである。1887年以降に官設鉄道と私鉄の路線が増え、踏切事故が増加し始めたのに伴い、人々は踏切地蔵を建立し始めたのかもしれない。一方で、明治初期の廃仏毀釈運動、さらに1873年に始まった土地の私有化と地租改正によって、踏切地蔵の出現が踏切事故の増加時期より遅れる原因となった可能性がある。

前者の廃仏毀釈運動は、明治初期に発令された神仏分離令が引き金となり、寺院や石仏を破壊する運動である。この時期には、日本の多くの仏教文化財が破壊され、石仏は損傷を受け、地蔵の設置も影響を受けた。ただし、この運動が長く続いたわけではなく、1880年代から1890年代にかけての踏

切地蔵の建設にどの程度影響があったかについては、さらなる検証が必要である。

後者は土地の私有化を認め、それ以降日本の土地には無主のものが基本的に存在しなくなったこと⁽⁵⁾を意味し、地租改正後には土地所有権が基本的に確立され、地蔵を設置するためには土地所有者から土地を借りる必要があった。その中でも踏切地蔵の設置はさらに複雑である。前述の通り、これらの踏切地蔵は踏切の隣に建てられたものである。その踏切という空間が鉄道会社の敷地である。そのため鉄道会社と協議を行い、土地を借りた上で地蔵を建立する必要がある、これが地蔵の建立に、より長い時間を要する原因となると考えられている。

一方、全ての踏切地蔵の建立時期を見ると、現在建立時期の確定できる踏切地蔵では、太平洋戦争終戦を境に、戦前及び戦中に建立されたものが11ヵ所、戦後に建立されたものが17ヵ所ある。その中で、戦前及び戦中の踏切地蔵は1930年代に集中しており、戦後の建立は1950年から1970年の間に集中している。1930年代には、道路上の自動車の増加、列車の数の増加及び列車の速度向上、鉄道会社による踏切安全設備への投資減少、加えて踏切の建設時に残された様々な問題により、踏切事故の数が増加し、年間で400件から500件に達した（吉田2016）。戦後の1950年から1970年の間には、経済の急速な成長に伴い自動車が激増し、踏切の問題がまだ解決されていなかったため、踏切事故が頻繁に発生した。

これに対応するのは、「魔の踏切」という言葉が新聞記事に使われている数量ということである。新聞記事のタイトルに「魔の踏切」が使われた時期が、踏切地蔵が集中して建立された時期と一致している点である。朝日新聞において明治初期から現在まで、タイトルに「魔の踏切」という言葉が登場する記事は合計64件あり、そのうち1930年代に23件、戦後の1950年から1970年に16件ある。毎日新聞では戦後から合計31件で、その中で1950年から1970年には24件ある。読売新聞は明治初期から現在まで合計26件である（地方版は詳細が確認できないため統計に含まれていないが、地方版での「魔の踏切」に関する記事は合計33件ある）。そのうち1930年代に6件、1950年から1970年には9件ある。つまり、人々の踏切に対する不安の感情を証明している「魔の踏切」という言葉の使用が、その不安を緩和するために建立された踏切地蔵の建立時期と一致しているといえる。

以上、踏切の地蔵というカテゴリーの地蔵、及び踏切の地蔵の誕生に関する歴史とその時代背景について簡潔に説明した。しかし、踏切の地蔵は、それらが踏切の隣に建てられているという点以外にも、名前は異なるがほぼ同一の機能と作用を持っているという特徴がある。この点については、以下の地蔵の概述と機能の分析で詳しく説明する。

Ⅲ 踏切の地蔵の概要

本章は、本研究の分析において用いた地蔵に関する文献調査及び聞き取り調査から得られた全ての資料概説である。また、以下の地蔵は本研究で収集した全ての地蔵の一部にすぎず、これらは比較的詳細な資料が存在し、分析の可能性があるため、本研究の分析対象として選ばれた。他の地蔵については、時代が古く、関連資料の欠如やフィールドワークでの結果が出なかったため、詳細な分析及び研究を行うことができなかった、または地元が存在しているがまだ収集していない地蔵である。そ

らの地蔵は今後の課題として収集を続ける。

(1) 北海道

① 札幌―桑園延命地蔵

住所：札幌市中央区北六条西 10 丁目 11-2

建立年：昭和二年（1927）

文献資料：桑園延命地蔵尊ホームページ、地蔵尊看板、『交通安全加護の桑園延命地蔵尊由来史』、『札幌市史』

概説：当時の札幌市北七条 11 丁目の踏切は、その位置と悪い天気により視界が悪く、警報器や遮断機の設置もなかったため、事故が頻発し、364 人が死亡という大変なことになる。そのため、当時の近隣住民はそれを「魔の踏切」と呼んだ。解決策を探していた住民は、東京で同様の「魔の踏切」があり、地元住民が地蔵を建立した後、事故が起きなくなったという話を聞き、同様の地蔵を建立することを考えた。これを受けて、北海道庁北門の住民が結成した北門クラブと北五条郵便局付近の住民が結成した桑園クラブが、日本最大の地蔵を建立することを目指して共同で計画し、1927 年に桑園延命地蔵を建立した。この地蔵は踏切事故の犠牲者の慰霊と事故防止のための魔除け、通行人の交通安全の加護のために用いられる。地蔵前の広場では毎年 7 月 24 日に慰霊式と交通安全祈願会を行っている。地蔵の台座にはその建立経緯が刻まれており、現在の管理者である桑園延命地蔵保存会は、公式ウェブサイトと『交通安全加護の桑園延命地蔵尊由来史』⁽⁶⁾と呼ばれる冊子にて地蔵の建立歴史と関連データを詳細に記録している。

(2) 東京

① 発心地蔵尊菩薩

住所：東京都立川市曙町 3 丁目

建立年：昭和九年（1934）

文献資料：地蔵尊看板、オンライン怪談、CD『稲川淳二の実体験怪異談「怖いから聞かないで」——魔界の踏切』

概説：大正時代、この地蔵の近くにある野沢踏切という踏切は事故が頻発し、また両側が林であるため飛び込み自殺事件も多かったため、地元住民はこの踏切を「魔の踏切」と呼んでいた。昭和 9 年に、踏切近くの工務店の店員が踏切で事故に遭い死亡したことをきっかけに、工務店の店長と地元の有志たちが踏切で轢死した者を供養し、今後その踏切で事故が起きないように加護するためにこの地蔵を建立した。

後に戦争の空襲により、この地蔵は大きな損傷を受けた。その後、再び事故が発生したため、当初の建立者は 1955 年に地蔵を再建し、供養を再開した。1988 年には全国交通安全運動に伴い、その地蔵の修復が行われた。2010 年、中央線の立体交差化に伴い踏切は消失したが、地蔵は残され、現在はその隣のトヨタ自動車学校によって管理・清掃が行われている。同時に、高架橋化する前この野沢踏切は有名な心霊スポットであり、稲川淳二もこの踏切と地蔵をモデルにして「魔界の踏切」という怪談 CD を制作したことがある。

② 交通安全災厄除け地蔵尊

住所：東京都中野区白鷺町2丁目

建立年：昭和十五年（1940）

文献資料：地蔵尊看板、三吉朋十 1972『武蔵野の地蔵尊都内編』p.136

概説：鷺ノ宮駅の踏切は、車道が狭く交通量が多いため、その踏切や近隣の道路で頻繁に交通事故が発生している。この問題に対処する、踏切近くの福蔵院の星野俊英大僧正は、事故犠牲者の慰霊供養と、「交通安全」「国土の発展」「人の調和と幸福」の三つの祈願を込めて、1937年に帝展の審査員である佐々木大樹にこの地蔵を制作依頼した。この地蔵の建立は、中野区の多くの議員の支援を受け、「日本最初の交通安全地蔵」として資金援助を受けた。建立後、毎年3月と9月に地蔵祭と慰霊祭が行われる。祭りの開催により、周囲の各団体が地蔵を供養し、「交通事故防止安全会地蔵講」が形成され、地蔵の管理と供養をしている。その後、交通安全災厄除け地蔵尊建立四十周年の記念事業として、野方警察署管内の全ての交通事故犠牲者の永代供養と交通安全意識の普及のため、地蔵講は1976年に交通安全地蔵の隣に「交通安全無事故祈禱塔 交通安全事故死亡者供養塔」、及び供養塔の前の観音菩薩像を建立した。

この供養塔の裏面には、慰霊塔の建設供奉に協力した団体名が刻まれており、中野区の議員、野方警察署、西武鉄道株式会社などの地元政治・商業団体名が含まれている。この供養塔と最初の交通安全災厄除け地蔵は、地蔵講によって観光名所及び貴重な文化財として数回修繕されている。

③ おまもり地蔵尊

住所：東京都世田谷区代沢5丁目

建立年：昭和十一年（1936）

文献資料：地蔵尊看板、新聞

概説：昭和時代にこの踏切は事故が頻発し、多数の死傷者を出したため、地元住民に「魔の踏切」と呼ばれていた。朝日新聞1935年9月28日の東京朝刊に「小田急魔の踏切」という報道が掲載されており、その踏切での事故の深刻さを証明している。また、近隣住民の長女と次男が相次いでその踏切で事故死したため、踏切での犠牲者の魂を慰め、今後の事故を防ぎ、遺族を慰問するために、地元住民が資金を集めてお守り地蔵を建立した。この踏切は2013年に地下化改造と共に消えた。現在、地蔵の管理者は不明であるが、近隣住民が自発的に清掃し、花を供えている。

④ 梅丘延命地蔵

住所：東京都世田谷区梅丘1丁目

建立年：昭和二十六年（1951）

文献資料：地蔵尊看板

概説：梅丘駅近くの踏切は、戦後の地域発展に伴う人口急増と安全対策の遅れにより、事故が頻発し、特に多くの幼児や子供の死亡が発生した。これらの踏切事故の犠牲者に鎮魂供養を行い、今後の事故を防ぐために、町内会、婦人会、商店会の三つの組織が資金を集めて、1951年に踏切のそばに地蔵を建立した。梅丘駅の改修に伴い、地蔵は一時的に近くの豪徳寺に移され、2004年の改修後、

踏切は高架化に伴い消失し、地蔵は踏切のそばから駅の出口近くに移動された。また、現在の駅の出口近くの街区地図には、地蔵の位置が明確にマークされている。現在は当初の商店会によって管理・供養が行われており、最初に建立された時の死者慰霊供養と事故防止に、家内安全や健康長寿を加護する機能が追加されている。

⑤ 栄町延命地蔵

住所：東京都北区栄町 21

建立年：昭和五十五年（1980）

文献資料：地蔵尊看板、礎、新聞

概説：地下通路化される前、現在の地蔵が位置する場所の近くは東北線の第二踏切である。この踏切は他の踏切に比べて幅が広く、通行者の通行時間が長く、安全装置が不足していたため、事故が頻発していた。特に、子供の死傷者が多く、またこの踏切で自殺を図る人も多かった。1950 年から 30 年以内に 30 人以上が踏切事故あるいは自殺で亡くなった。そのため、この踏切は近隣住民から「魔の踏切」と呼ばれていた。

この近くの踏切でこれ以上の犠牲者が出ないように、地元住民が自発的に資金を集め、当時の町内会「栄町親和会」と相談した後、地蔵の建立を計画した。その地蔵は、町内に住む彫刻家によって制作された。地蔵の準備資金は 16 万円を超えたが、当時の彫刻家は町内の皆のためとして、材料費の 5 万円のみを受け取り、残りの資金は地蔵堂の建立に使用された。

1980 年にこの地蔵は「延命地蔵」と名付けられ、開眼式が行われた。地蔵堂内には町内会が記述した地蔵の来歴が掲示されており、その由来史には地蔵の建立経緯や、踏切の犠牲者を供養する、町内の交通安全や家内安全を守る目的が記されている。地蔵堂の隣にある礎には、地蔵の建立経緯と供養への感謝が彫刻されている。

⑥ 国分寺延命地蔵

住所：東京都国分寺 2 丁目（遷座中）

建立年：昭和二十六年（1951）

文献資料：地蔵尊看板、新聞記事

概説：1946 年、東京経済大学がこの地に移転し開校したことで、現在大学通りと呼ばれる通りは学生の通学路となり、人の流れが増えたため、その通りの踏切で事故が発生し始めた。当時、その通りの商店会「東栄会」の会長は、踏切の犠牲者を供養し、今後の通行者の安全を守るために、自身の土地を無償で提供し、その土地にこの地蔵を建立した。その後、その踏切で事故は一回も発生したことがない。

この地蔵の現在の所在地は、当初の場所ではない。2012 年以前、地蔵があった土地の地主が土地を返還するよう要求したため、地蔵は別の場所に移動しなければならなくなった。その後、近くの駐車場の一角を毎月 1950 円の賃貸料で借りて地蔵を設置し、2013 年には商店街の居酒屋の店主が自店の前の土地を提供した。これが現在の地蔵の所在地である。現在地蔵を管理している東栄会は、地蔵の土地問題に関して市政府と協議を行ったが、「政教分離原則」により土地の提供を拒否された。そ

の通りにあった踏切は線路の地下化改造に伴い消失し、踏切の移動時に地蔵を撤去する提案もあったが、その地蔵は既に商店街の象徴となっており、地蔵の名前を冠した商品や活動があるため、地蔵は保持されることとなった。

この地蔵の案内板には、地蔵の建立経緯が書かれており、あるうわさも記載されている。そのうわさによると、かつて3人の大学生が酔っぱらって地蔵を下水道に置いたところ、そのうちの1人が踏切事故に遭遇した。その後、残りの2人が地蔵に花を供えるようになったということである。

⑦ 久我山駅交通安全地蔵

住所：東京都杉並区久我山7

建立年：昭和四十九年（1974）

文献資料：新聞記事

概説：この地蔵は、久我山駅近くの踏切の隣にある庄司石材店の店主が1974年に建立した。1974年にその石材店の店主の次男が踏切での事故で亡くなった。息子を供養し、その踏切を通る歩行者の交通安全を加護するために、愛知県の仏師に息子の姿で地蔵を彫刻させた。地蔵の正面には「交通安全」と刻まれており、賽銭箱が設置されている。毎年、店主は賽銭を集めて交通遺児育英会に寄付している。地蔵には店主や通行人が供えたおもちゃがよく置かれ、毎年地蔵の帽子は季節に応じて変更されている。

(3) 神奈川

① 塚越地蔵、交通安全地蔵

住所：川崎市幸区塚越1丁目

建立年：戦後、具体的に確認できない

文献資料：新聞記事

概説：この塚越踏切は、朝夕の交通量が多く、遮断機が設置されていないため、頻繁に踏切事故が発生しており、また多くの人がこの踏切で自殺している。踏切の犠牲者に慰霊供養を行うため、当時の地元婦人会が戦後にこの塚越地蔵を建立した。具体的な建立時期や経緯は現在不明である。その後、婦人会は現在の町内会に再編されたが、町内会にもこの地蔵に関する具体的な情報はない。塚越地蔵の右側の小さい交通安全地蔵については、約30年前にその踏切で再び事故が発生し、子供が亡くなったため、遺族と町内会が共同で建立した。両地蔵は現在町内会によって管理されており、毎年3月と9月に踏切地蔵供養会が行われる。遺族、周辺の小中学生、教師、地元住民が参加し、平均50人以上が供養会に参加している。

② 花月地蔵尊

住所：横浜市鶴見区生麦5丁目慶岸寺（2023年に遷座した）

建立年：昭和四十一年（1966）

文献資料：地蔵尊看板、慶岸寺チラシ、新聞

概説：当時、花月園前駅と呼ばれていた駅近くの踏切で頻繁に事故が発生し、犠牲者の中に多くの

子供が含まれていた。読売新聞は1967年に「京浜急行一魔の踏切で五人目」というタイトルで、その踏切での事故による子供の死亡を報道した。これらの踏切事故で亡くなった子供たちの遺族とその所属する婦人会が資金を集め、踏切のそばにこの地蔵を建立した。地蔵の側面には全ての犠牲者の名前と年齢が刻まれている、その中に子供だけでなく、この踏切で亡くなった大人も共に供養されている。その後、この地蔵は遺族によって管理されていたが、遺族が供養や清掃を続けることが困難になったため、2023年6月に慶岸寺に移され、永代供養が行われることになった。

現在慶岸寺の係員はこの地蔵の歴史について、こう説明した：「現在の花月総持寺駅は以前の花月園前駅である。昭和時代にその駅近くの踏切でよく事故が起こった。そのため踏切は「魔の踏切」と呼ばれている。地元の婦人会は死者を慰めるために、この地蔵様を建てた。発起人は明確に記録されている。その後は踏切のそばに供え続けられ、地元の住民は供え物をしたり、掃除をしたり、花を捧げたりした。

しかし、今は発起人たちも年を取ったので、長期的に供養できるように慶岸寺に遷座された。今年の6月に移され、お坊さんが法要をやった。この地蔵様は現在、寺の他の地蔵と共に供えられていて、特別な祭礼はもう行われなと思う。過去には遺族が法事を組織したことがあるが、それはもうかなり昔のことである。

当初の建立は死者を慰め、供養するためだった。この踏切では常に事故が起こり、ここで亡くなった人々が安息を得られないといわれていた。特に死者には子供が多かったため、地蔵が建てられた。それ以降、事故は少なくなった、だから皆の魂はもう安息を得たといえる。同時に、地蔵様は地域の人々の交通安全も守っている。」

③ 鵜沼海岸地蔵尊

住所：藤沢市鵜沼松が岡4丁目

建立年：昭和三十三年（1958）

文献資料：地蔵尊看板

概説：この地蔵は一般的に踏切地蔵と呼ばれているが、その台座の正面に刻まれている名前は「交通事故犠牲者慰霊並びに事故防止地蔵尊」である。1958年まで鵜沼海岸駅前の踏切には遮断機が設置されていなかったため、同年にその踏切で事故が発生し、子供が亡くなった。その後、子供の遺族と有志は、その子供の慰霊と、その踏切を通る全ての子供と歩行者の安全を願って、同年にこの地蔵を建立した。その後、2019年に遺族、商店街、近隣住民が資金を集め、地蔵の修繕と整備を行った。

④ 厄除地蔵尊（松田町）

住所：足柄上郡松田町新松田駅前踏切

建立時間：昭和四十年代、詳しい建立年は確認できない

文献資料：不明

概説：この地蔵の具体的な建立時期や経緯はまだ明らかでないが、確かなことは、新松田駅前の踏切で1960年代に事故が発生し、3～4人が死傷したことである。事故の犠牲者の慰霊を行い、今後踏切事故が発生しないように祈るため、近くに住むある老婦とその所属する婦人会がこの地蔵を建立し

た。以前はその老婦が管理していたが、最近亡くなったため、現在は老婦の孫が管理している。

(4) 静岡

① 二本塚厄除地藏尊

住所：静岡市清水区追分

建立年：昭和三十年（1955）供養碑、昭和四十六年（1971）地藏尊

文献資料：地藏尊看板、『追分今昔記』、静岡新聞 1993 年 3 月 25 日

概説：この二本塚踏切は、見通しが非常に悪く、遮断機や警報器がないため、事故が頻発し、また自殺する人も多かった。これにより地元住民はこの踏切を非常に恐れ、夜間には近づかないようにし、「二本塚魔の踏切」と呼んでいた。事故が絶えず発生していたにもかかわらず、長らく適切な安全装置が設置されなかったため、1923 年から 1924 年にかけてほぼ毎月事故が発生していた。その後、追分町で和菓子店を営んでいた府川松太郎は、これらの犠牲者の供養のために 1955 年に法事を行い、墓標を設置した。その墓標は 3～4 年で腐食し、何度か交換された後、1971 年に現在の二本塚厄除地藏に変更された。その後、その踏切で事故は一度も発生していない。

② 五ヶ堀踏切地藏尊（延命地藏）

住所：焼津市五ヶ堀之内 951

建立年：昭和十年（1935）

文献資料：地藏尊看板、『焼津市史 民俗編』、『ふるさとのあゆみ焼津市五ヶ堀之内公会堂新築落成記念』

概説：この地藏は以前、現在の位置からそれほど遠くない東海道本線の踏切の近くにあった。その踏切は見通しが悪く、まだ遮断機や警報器などの安全対策が設置されておらず、また通学路として多くの人が利用していたため、事故が頻発し「魔の踏切」と呼ばれていた。1934 年にその踏切で自動車と列車の衝突事故が発生し、3 名の死傷者が出たことがあった。事故の犠牲者を慰霊し、今後の事故を防ぐために、当時酒店を営んでいた須原くまさんと念仏仲間の人たちを中心となり、1935 年にこの地藏を建立した。地藏が建立された後、その踏切で事故は一切発生していない。後に 2006 年の踏切改修に伴い、地藏は現在の大龍寺に移され供養された。しかし、その後大龍寺は荒廃し、現在はその所在地の町内会によって管理されている。また、その地藏の後ろには八兵衛供養碑⁽⁷⁾があり、焼津市史によると、この碑は鉄道で轢死した怨霊を（地藏と共に）供養するために使用されているとある。

(5) 愛知

① 踏切地藏（二ツ杵駅）

住所：清須市二ツ杵駅前

建立年：昭和三十年（1955）

文献資料：『にしびの文化財第 2 集 神社・仏閣』

概説：この地藏の隣の二ツ杵第一号踏切は、遮断機や警報器などの安全装置が不足しているために

事故が頻発していた。踏切事故の犠牲者の慰霊供養と踏切の通行安全のために、山田次郎左右衛門を代表とする地元の有志が1955年にこの地蔵を建立した。一般には踏切地蔵と呼ばれているが、史料には「大円鏡智為災害死亡者諸精霊菩提宝塔」として名前が記録されている。現在も地蔵は当初の有志と家族によって管理されており、以前は毎年8月24日に地蔵盆が行われていたが、ここ十数年は行われていない。

② 踏切地蔵堂

住所：名古屋市中川区西日置町

建立年：昭和九年（1934）

文献資料：新聞記事、中日新聞社会部編『愛知県内80ヵ所—お地蔵さん見つけた』

概説：この地蔵堂は名古屋駅の近くにある高架橋の下に位置している。地蔵堂の隣にある石碑には、「踏切地蔵堂」と「昭和九年四月再建」という文字が刻まれている。ただ現在はその最初の建立時期を確定することはできない。

朝日新聞2006年の記事と近隣住民への聞き取り調査によると、名鉄とJRの線路が高架化される前、ここの踏切で事故が発生して、子供や鉄道会社の作業員が轢死したなど諸説があった。事故の犠牲者を慰め、事故再発を防ぐために、石川太郎という地元住民がこの地蔵堂を建立した。その後、線路が高架化されて踏切は現在の高架橋に変わったが、赤信号灯がなく、交差点の交通量も多いため、ここで交通事故が頻発する。そのため、交通安全を加護するためにも使用されている。また、この地蔵堂は戦時中に道路拡幅の邪魔になったため破壊された。戦後の修繕については、地蔵堂の屋根のひさしが道路側に出ていたため、名古屋鉄道株式会社と名古屋市からの支援が得られず、不法占拠と見なされることもあった。その後、1977年まで地元住民の支援を受けてようやく地蔵堂の修繕が行われた。この地蔵堂内には、サイズや形状が異なる7尊の地蔵、不動明王と菩薩像がある。最も右側にある地蔵尊の台座には「石川太郎」と刻まれている。この地蔵の清掃と供養は、建立者とその家族によって管理されており、現在の管理者は近くで喫茶店を営んでいる石川氏の孫である。または地蔵の背後には「はくりゅう大神」と書かれた木の板が隠されているが、その像が近くの白龍神社と関連があるかどうかは確認されていない。

③ 交通安全地蔵、身代り地蔵（上ゲ駅）

住所：知多郡武豊町上ゲ駅前

建立年：昭和四十年（1965）

文献資料：地蔵尊看板、『武豊町内地蔵巡り案内』

概説：上記の2尊の地蔵は、知多郡武豊町の上ゲ駅に位置している。そのうちの交通安全地蔵は駅の入り口に、身代り地蔵は駅の南方約100メートルの踏切のそばにある。

踏切のそばにある身代り地蔵は1965年に建立された。当時、この地蔵がある踏切は事故が頻発するため、近隣住民に「魔の踏切」と呼ばれていた。踏切事故の犠牲者を供養し、人々に踏切の安全に注意を促し、今後の交通安全を加護するために、地元の有志が資金を集めてこの身代り地蔵を建立した。地蔵が建立されて以来、踏切での事故は一切発生していない。この地蔵は1994年に一度修復さ

れた。現在、この身代り地蔵は、元の有志及びその家族によって管理と供養が行われている。

一方、駅前の交通安全地蔵は、1965年に名古屋鉄道が駅の敷地内に建立したもので、踏切の身代り地蔵と同様の動機で建てられた。すなわち、事故犠牲者の慰霊と線路や交通の安全を加護するためである。その他の建立経緯については、まだ詳しい資料が得られていない。現在、この地蔵の供養と管理は上ヶ駅の係員によって行われている。

(6) 大阪

① 魔除地蔵尊（東大阪市）

住所：東大阪市源氏ヶ丘 1-1

建立年：昭和三十三年（1958）

文献資料：不明

概説：地蔵の位置の隣にある踏切は事故が頻発するため、「魔の踏切」と呼ばれている。この踏切での犠牲者を供養し、災難を避け消除するために、その所在地の町内会、商店会、地元の有志が資金を集め、1958年以降にこの魔除地蔵を建立した。

この地蔵が「魔除地蔵」と名付けられた理由について、近隣住民の間では異なる解釈がある。ある住民（男性、70代）は、この踏切で亡くなった人は全て事故という「魔」のせいであり、災難を避けてこれ以上犠牲者が出ないようにするために、その「魔」を除去する必要があると考えている。一方で、別の住民（男性、80代）は、この場所で常に事故が発生するのは「魔」が存在するためであり、「魔」を取り除けば事故は起きなくなると考えている。しかし、「魔」が具体的に何を指すのかについては確かな説明はない。

② 子安地蔵尊

住所：大阪市住吉区帝塚山 4 丁目

建立年：昭和四十五年（1970）前後

文献資料：新聞

概説：この地蔵の具体的な建立時期に関する資料はまだ見つかっていない。近隣住民の話によると、以前は現在の位置ではなかった。少なくとも 1970 年より前から存在しており、当時は近くの街角にあった。現在の位置の前にあった帝塚山踏切には、遮断機や警報器がなく、電車（南海高野線）の速度が速いため、この踏切では毎年事故が発生していた。そのため、町内会は協議の結果、地蔵を元の位置からこの踏切の前に移動させた。その後、事故は一度も発生したことがない。

なぜこの地蔵は踏切の真ん中に置かれるのだろうか。それは通行者に注意を促すためのものだからである。かつて地蔵を撤去する提案があったが、町内会の会長は「事故がなくなったのはお地蔵さんのおかげ」として、その提案を拒否した。また、2016 年に地蔵堂の整備が行われた。

以上、本研究で調査を完了し、その後の分析を行った踏切地蔵に関連する歴史や情報の概要である。具体的な地蔵の写真、碑文、関連する歴史文献については、この研究の付録で詳細に整理する。

IV 踏切の地蔵の機能

民間における地蔵を建立する動機について、石川は以下の通り、11 点にまとめている：

1. 住民または村域の守護のために、その機能を重視して祈願の対象として勧請。
2. 地蔵信仰の信奉者たる僧徒などの唱導・教化により勧請または創祀。
3. 夢告その他の霊異により海中・土中から出現。
4. 巫覡の勧めや個人の信心から勧請または創祀。
5. 犠牲者または不慮の死をとげた者の慰霊・供養。
6. 未成年者一特に幼児期に死亡した子供や水子の慰霊・供養。
7. 難病で苦しみ死したる者の生前の誓願により創祀。
8. 交通の要衝や難所または行路病死者があった箇所への守護・慰霊。
9. 瘠地・墓地への慰霊・供養・先亡救済。
10. 地蔵堂または地蔵霊場における先亡供養。
11. 土地の功労者へ報徳として創祀。

以上、石川は人々が地蔵を建立する動機と願望を概説している（石川 1995：114）。しかし、実際にはこれらのまとめには、まだ検討されていない問題点が存在している。具体的には、これらの地蔵を建造したのは誰か、地蔵の機能はただ一つだけなのかという問いである。異なる建立者と使用者がいる中で、他の場所で同名の地蔵でも、ここでは全く異なる意味を持っている、あるいは複数の機能を持つ可能性がある。したがって、これからの分析では、同一の地蔵が何度も登場するかもしれない。これは地蔵が、伝統的な民俗文化として人々によって柔軟に解釈され、使用される例証である。

（1）死者慰霊供養

中世に確立された死者の救済や供養といった地蔵の持つ機能は、明治以後も続いている。むしろ、上記の踏切における地蔵において、死者の供養と救済は最も一般的な機能の一つとされている（清水 2023）。

しかし、先に述べたように、地蔵は死者を供養し慰める機能を提供するが、実際の踏切地蔵においては、建立者や管理者が異なるため、その供養の意味合いも異なる。前章でまとめた全ての関連資料から明らかなのは、地蔵の建立者が遺族だけではなく、地元の有志や町内会、婦人会、商店街などの集団、またはこれらの集団と個人が浄財や土地を提供して地蔵を建立するケースが多数であることである。つまり、地蔵による死者供養は個人的な供養と集団的な供養が混在している。そして、これら二つの異なる主体による供養の意味合いと出発点は同じではないだろう。この問題について、筆者は地蔵の死者供養機能について、死者の遺族や親しい知人と第三者の二つの視点が存在すると考えている。

序論で述べた通り、踏切に関する鉄道怪談では、踏切事故が頻発することがその踏切で横死した人々に帰因することが多い。これら横死した人々が怨霊となり、死亡した場所で祟ることで踏切事故が発生するとされている。『焼津市史』に記載されているように（「五ヶ堀之内では鉄道で轢死した怨霊と共に供養されたり」）、鉄道の轢死者は怨霊と見なされている。これは怪談と同じ解釈を持ってお



写真1 稲川淳二の怪談 CD 四番目の「魔界の踏切」は前述の野沢踏切と発心地蔵菩薩と関連している 筆者所蔵品

り、異常死した人々が怨霊となり事故を引き起こすとされ、そのような事故を止めるためには、慰霊供養と鎮魂を通じて怨霊を救済する必要がある。

第三者の視点から見ると、事故の発生とその場で横死した人々とを結びつけるのは容易である。そのため、踏切に関する鉄道の怪談が絶えず出現し、現代ではこれらの踏切が心霊スポットになることもある。例えば、立川市の発心地蔵は現在、非常に有名な心霊スポットであり、稲川淳二もこの地蔵をモデルにした怪談を創作している。⁽⁸⁾ 及川が指摘していたように、異常死者が怨霊になるかどうかは、実際には死者に対する記憶を持っているかどうかに関係している。もし死者に対する記憶がある場合、事故や自殺の場所を見て死者の悲惨な死を思い出し、恐怖の感情が生じることになる（及川 2023）。そのため、自分を安心させるために、特定の儀式のような対応が必要になることがある。しかし、ここでの記憶についてさらに説明する必要がある。この記憶は死者個人に対する記憶ではなく、異常死に対する集団的な記憶を指す。つまり、このような踏切事故での悲惨な死と遺族の悲しみを想像できるものである。これらの創作者のほとんどは死者との直接的な関係を持たず、言い換えれば、死者への記憶がないが、異常死という死の記憶があり、その死の恐怖が想像できる。したがって、これら踏切に関する鉄道の怪談や心霊スポットの創作の出発点、またはその恐怖の特性は、ここでの異常死者の怨念への恐れから来ている。したがって、第三者の視点から考えると、地蔵による死者供養は、これら異常死者の怨念を解消するための合理的な解釈となり得る。この点は、怪談の創作者だけでなく、これらの地蔵の建立者にも見られる。特に、建立者が死者と全く関係がない場合に、このような可能性が存在する。

しかし、死者の遺族や親しい知人の視点から見ると、これらの地蔵のほとんどが怨霊と直接的な関連を示す証拠が存在していない。他の地蔵の案内板や歴史資料では、死者を怨霊と見なす直接的な言



写真3 鶴沼海岸地蔵尊 台座の前に数本新しいお茶が
捧げられる



写真4 久我山交通安全地蔵 台座下に賽銭箱があり、
台座に育英会からの領収書が貼付されている

に現在地に地蔵尊を建立されました。

つまり、地蔵の建立者はこれらの踏切事故の犠牲者をよく知らない、または全く関係がない可能性がある。それにもかかわらず、信仰心から無償でこれらの踏切事故の犠牲者のために地蔵を建てたのである。これは供養や鎮魂の目的を超えた、民衆の「慈悲」の表れである。

また、この慈悲は地蔵への持続的な供養にも表れている。ここでの持続的な供養は地蔵との関係者に限らず、地蔵の前を通りがかり、手を合わせたり、供物を捧げたり、お金を投じる通行人も含まれる。例としては、静岡市清水区的地元住民である府川松太郎が編纂した『追分今昔記』の68ページに、二本塚厄除地蔵について次のように記されている：

二本塚を通る人達は、地蔵尊に対し深く頭を下げ、あるいは両手を合わせ、拜む人が多くなった。四季を通して花が絶えることがなく、ワンカップの酒を供えてくれる人もでてきた。(府川1986:68)

また、写真3の鶴沼海岸地蔵尊の写真のように、地蔵の前に供えられた酒や茶がよく見られる、あるいは写真4のように賽銭箱を設けた久我山交通安全地蔵は常にいくらかの賽銭を得ている。これらの慈悲から生まれた供養によって、地蔵は死者への供養を維持することができる。

(2) 魔、厄除

前章で既に説明したように、地蔵の供養には実際に二つの視点が存在し、これらの視点において地蔵の死者供養機能及び目的は異なる。しかし、筆者の調査によると、これらの踏切地蔵の中には異なる機能や目的を持つ地蔵が存在する。これらの地蔵は魔除地蔵や厄除地蔵と呼ばれる。既に完了した

調査によると、魔除または厄除の地蔵は合計3体存在する。具体的には、東大阪市の長瀬駅近くの踏切にある魔除地蔵尊、神奈川県松田町の新松田駅前の踏切の厄除地蔵、及び静岡市清水区の桜橋駅前の踏切にある二本塚厄除地蔵である。

他の踏切地蔵と同様に、この3体の地蔵も踏切事故の犠牲者を供養するために建立された。しかし、これら3体の地蔵の名称及び建立者には違いがある。一般的な踏切地蔵の名称は延命地蔵や交通安全地蔵が多く、子供に関係する場合は子守地蔵や子安地蔵と呼ばれ、その他はその位置に基づいて踏切地蔵と命名されることが多い。前述の分析では、これらの地蔵が怨霊の出現と消滅に関連している可能性があるが、名称だけでは直接的な関連性は見られない。また、建立者に遺族がいる場合、怨霊の鎮魂や慰霊のために使用される可能性は低いと考えられる。しかし、この3体の地蔵の命名からは、地蔵が建立された時に踏切に何らかの厄や魔が存在し、事故を引き起こしたと認識されていたことがうかがえる。したがって、厄除けや魔除けの手段が必要とされたのである。

長瀬の魔除け地蔵について、地元住民は、この踏切は頻繁に事故が発生するために「魔の踏切」と呼ばれていたと述べた。したがって、魔の踏切の隣に魔除地蔵が存在することは、偶然ではないと考えられる。同様に、静岡市の二本塚厄除地蔵も、事故が頻発し、約130人が事故で亡くなっている「魔の踏切」と呼ばれる踏切の隣に建てられ、ここでの死者を供養する。一方、松田町の踏切については、「魔の踏切」と呼ばれる証拠はないものの、町内会会長によると、この踏切でも複数の事故が発生し、数名が死亡したため、これらの死者を供養する目的で厄除地蔵が建立されたという。序論で「魔の踏切」という言葉を分析した際には、「魔」には二つの解釈があることを説明した。一つは踏切怪談のように、事故を引き起こす動物や轢死した者の怨霊を指すもの。もう一つは神秘的で恐ろしい存在としての曖昧な解釈である。ここでの魔除地蔵が指す「魔」がどちらの解釈に該当するかについては、地元住民も明確な答えを出していない。前節の死者慰霊供養の分析では、第三者の視点から地蔵の慰霊供養は、実際には事故死した異常死者たちの怨念を消解するためのものと考えられることが多い。しかし、これらの地蔵が他と異なるのは、怨念を解消する方法が単なる供養ではなく、「除」に重点を置く、いわゆる魔を驅逐または消滅させることにある。

つまり、ここでの「魔」を轢死者の怨霊と見なすならば、地蔵の機能は死者を供養することと死者の怨霊を驅逐し事故の再発を防止するという二つの機能を持っている。しかし、二本塚厄除地蔵の建立者、地元のお菓子工場を運営している府川は、自分の著書にて次のように記述している：

今までこの場所で亡くなられた多くの人達を、温かく抱擁しながら、それぞれ成仏するよう導いて下さっていらっしゃると思う。(府川 1986: 68)

地蔵の建立者はこれらの事故死者とは知り合いではないが、死者を怨霊としては見ていない。また、この点において、北海道の桑園延命地蔵保存会が地蔵建立の資料を記録した際には「人々が地名を冠した地蔵尊を建立され死者の慰霊と魔除の供養をした処不思議にもそれ以来事故がなく、人々は祈禱したお陰であると深く信じている。」という死者の慰霊と魔除を並列して説明している。したがって、「魔」というものが必ずしも轢死者の怨霊を指しているわけではない。ただ偶然にも、筆者が調査したこれら3体の「除」を重点とする地蔵には、遺族が建立に関与していない。恐らく、死者の

怨霊と関連がなくても、遺族は地蔵で死者を供養する時、この「除」の意味を避ける傾向があるのかもしれない。

これらの魔が怨霊を指しているのか、あるいは他の神秘的で恐ろしい存在を指しているのかにかかわらず、これらの魔除、厄除地蔵は、人々の日常生活に影響を与える災厄を駆逐するために使用されている。注目すべきは、これらの地蔵は事故が再発しないよう災厄を除く、これは踏切地蔵のもう一つの重要な機能、すなわち交通安全の祈願と密接に関連している点である。

(3) 交通安全祈願

民間信仰において、地蔵は人々の様々な利益を満たすことができる（大島 1992）。したがって、現在、地蔵が人々の交通安全の願いを叶えることにも何の不思議もない。興味深いのは、前項で既に述べられたように、踏切地蔵は死者の供養の機能を持つ一方で、交通安全を守る機能も持っている、これら二つの機能が並列している。例えば、写真5「鶴沼海岸地蔵尊」の台座には、「交通事故犠牲者慰霊並びに事故防止」という銘文が直接彫刻されている。

つまり、交通安全祈願は、単に民衆によって任意に付加された現世利益にすぎないというわけではない。まず、上記の厄除や魔除地蔵が交通安全を保障できる理由は、これらの地蔵が交通事故の発生を防止することにある。これらの魔や厄が事故の原因となっているため、これらを除去することにより、事故が再発することがないということが考えられている。交通事故が再発しなければ、人々の交通安全は保障されることになる。この点については、これらの厄除けや魔除け地蔵だけでなく、下北沢のおまもり地蔵尊の石碑に「此付近踏切に於いて犠牲となりたる人びとの霊をも併せ供養し今後の災害を防ぎ」と書かれている例もある。同様に、花月地蔵尊の案内板には「交通災難のない」と記されており、発心地蔵尊には「今後の無事故を祈って」と書かれている。

このことから、これらの踏切地蔵が守っているのは、実際には事故防止であることが分かる。序論の分析によると、踏切事故は日常生活に重大な影響を及ぼし、人々に踏切を危険で恐ろしい空間として認識させる社会問題となっている。したがって、人々の不安を鎮めるために建てられた踏切地蔵は、事故の発生を防ぐことを重点としていると考えられる。これが、これらの踏切地蔵の看板に「地蔵の保護を受けて、建立以来踏切事故は再発していない」という文章がよく見られる理由である。



写真5 鶴沼海岸地蔵尊の台座

(4) 地域の安定

以上で分析した死者の供養、厄除け、交通安全祈願は、実際には地蔵が信仰の面で果たしている役割と見なすことができる。同時に、地蔵は具体的に存在するモノとして、独自の機能を持っている。

まず、これらの踏切地蔵は地域の安定を維持できることがある。第一章の分析によると、踏切事故は周辺住民に恐怖と不安を引き起こし、このような持続的かつ広範囲にわたる恐怖と不安は地域全体の安定に影響を与える。したがって、この不安を解消することは、地域の安定を守ることを意味する。一方、地蔵が移動されたり、供養されなくなったりすれば、地域の安定は破壊される可能性がある。この点に関して、立川の発心地蔵尊案内板には次のような内容が記されている：

ところが、その地蔵尊は昭和二十年四月三日の立川空襲で、隣接の立川工作所と共に被爆損傷し、荒れ果てたままとなり、この地区で再び轢死事故の惨事をみたところから、昭和三十年、房宗氏は有志の人々と、千人供養悲願の募金を行ない、地蔵尊を現在地に復興再建のうえ供養を営みました。

つまり、地蔵が様々な理由で供養を失い、その結果事故が再発したということは、元々保障されていた地域の安定が崩れたことを意味する。同様に、大阪市の帝塚山の子安地蔵についても、2017年1月12日の朝日新聞の大阪朝刊の「踏切前のお地蔵様」という記事に、その地蔵の所在する町内会の会長のインタビュー内容が載った。この記事は、かつて地元がこの地蔵を撤去する提案があったこと、そして町内会会長が「事故が無くなったのはお地蔵さんのおかげ」と撤去を反対していると報じている。言い換えれば、地域の安定を維持するためには、地蔵が必ず踏切のそばに実際に存在する必要がある。

これに対して、国分寺の延命地蔵では少し異なる事例が見られる。この延命地蔵の案内版にはある「うわさ」が記載されており、それによると、酔った大学生が3人、この地蔵を下水道に置いた後、そのうちの1人が事故に遭遇したという。これは上記の二つの地蔵と同様に、地蔵に対して不敬な行為や勝手な移動が事故の再発を招いた例である。しかし異なる点は、国分寺の延命地蔵は事故の発生を防ぐことによってのみならず、他の方法でも地域の安定を維持している。前章の資料で記載されているこの地蔵に関する四つの新聞記事は、実際には地蔵の移転問題について述べており、地蔵があった土地が地主の整理により回収され、地蔵が移転せざるを得なくなったこと、そして地蔵をなぜ直接撤去しないのかという問いに対し、当時の地蔵を管理していた商店会の会長が次のように答えている：

商店街のグッズやイベントも地蔵の名を冠したもので、なくすわけにはいかなかった。

この中のイベントについて、地元の商店会は地蔵を中心に「ぶんじぞうまつり」と呼ばれるイベントを開催しており、現在インターネット上でこの祭りの活気ある様子を記録した動画が見られる。⁽⁹⁾これにより、地蔵はその商店街のシンボルに変化したことが分かる。つまり、元々は踏切地蔵として存在した国分寺の延命地蔵は、踏切がなくなり、事故が地元住民の不安の原因でなくなった時、自身の

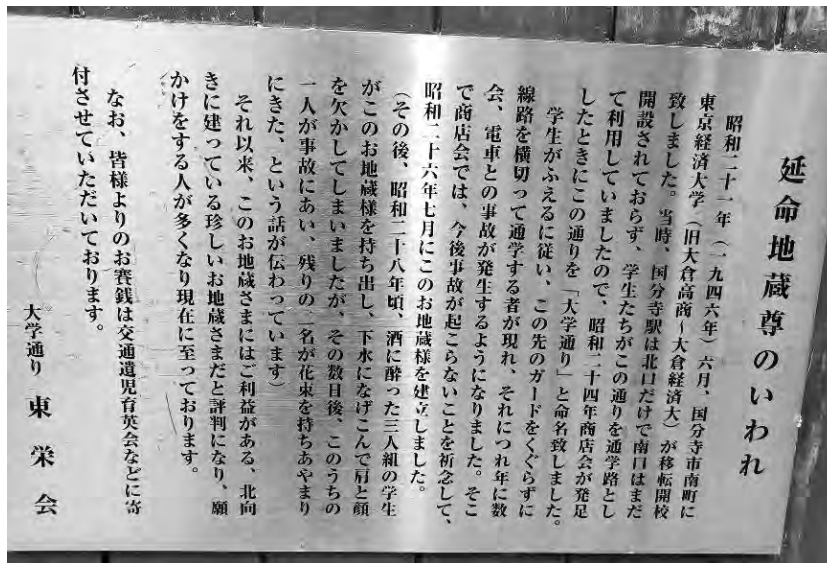


写真6 国分寺延命地蔵の案内板

機能を変化させることによって、引き続き地域の安定を維持し、さらにはその安定を向上させ、地元のコミュニティや商業を活性化することに貢献している。

(5) 危険の記憶装置

資料からよく見られるのは、地蔵が建立された後、踏切で事故が再発しなくなるということである。これは踏切と列車自体の安全技術の向上と関連しているが、同時に、これらの地蔵自体がある種の安全装置の役割を果たしている。一方、踏切の警告標識と同様に、これらの地蔵も通行人に対し、その踏切が危険な空間であることを思い起こさせる。

この点は、実際には心霊スポットの誕生と同じ理由に基づいている。及川が指摘したように、心霊スポットの誕生は記憶と関連している（及川 2023）。この記憶が存在しなければ、その場所に対する想像を構築することは困難である。同時に、イーファー・トゥアンは、空間が場所へと変化することは、物理的な存在から感情的な存在への転換であると指摘している（トゥアン 1993）。つまり、人々が自分自身の感情や記憶を物理的に実在する空間に付加するとき、その空間は場所へと変化する。

そして、地蔵は実際に踏切を危険な場所へと変換する機能を果たしている。東京や大阪のような大都市では、鉄道の路線が多く、踏切の数も自然と多くなる。これらの都市に住む人々にとって、ほとんどの踏切は特に注意を払わない普通の空間にすぎない。しかし、踏切地蔵の存在は、その踏切で多くの事故が発生したことを意味している。事故の原因は、五ヶ堀踏切のように視界が悪くて電車と通行人が互いに見えないために起こることもあるし、帝塚山子守地蔵のように遮断機がなく、通行人が警告を受けないために起こることもある。上述のどの原因であれ、これらの踏切を非常に危険な存在に変えている。しかし、これらの原因は実際には潜在的であり、日常生活では気づかないものである。一方、先に分析した通り、踏切地蔵の最も一般的な機能は死者を供養することであるため、踏切のそばに地蔵が現れると、通行者はその踏切の危険性に気づきやすくなり、踏切を危険な場所に変えることになる。

実際に、筆者がこれらの地蔵のフィールドワーク、通行者や近隣住民に聞き取り調査を行った際、

多くの人がこれらの地蔵の建立経緯について全く知らなかった。しかし、人々は、この地蔵の存在は恐らく以前の踏切事故に関連しており、死者を供養するために建立されたのではないかと述べている。つまり、歴史を知らなくても、これらの踏切地蔵は危険の記憶装置として、過去の悲惨な歴史と踏切の場所性を民衆に伝えている。小松が指摘したように、慰霊は故人の霊を慰める行為でありながら、同時に故人の記憶を忘れないようにすることでもある（小松 2000）。逆に言えば、故人の記憶が忘れられなければ、故人の霊は引き続き存在し続ける。したがって、慰霊と記憶は実際には共生の関係にある。そして、故人の霊と記憶はその故人が遭遇した事故とも関連している。つまり、事故自体も故人の記憶に含まれている。したがって、踏切地蔵は死者の霊への慰謝であると同時に、生者が死者の記憶を維持するための装置でもあり、また事故の悲惨な歴史を保存する産物でもある。

おわりに

鉄道の初期には、轢死の対象は動物が中心であり、それは鉄道が伝統的な生活空間を破壊することを反映していた。この破壊は、キツネやタヌキと鉄道の間の衝突として表現された。しかし、鉄道の建設が進んで、鉄道は徐々に民衆の住む街と日常生活に一体化していった。その過程で、事故や自殺も含めて急増し、轢死の対象は動物から人間へと変わった。これらの「異常死」が日常生活の中で継続的に起こるようになった。同時に、新聞や怪談で登場するようになった「魔の踏切」という言葉は、鉄道交通安全が深刻な社会問題となってきたことを反映しており、この社会問題は民衆の強烈な不安を引き起こした。また、この不安は民衆が生きている生活空間の中の不安定な要素になった。

社会問題が民衆の日常生活に影響を及ぼしたり、民衆の住む街道や町に不安定な要素をもたらしたりすると、民衆は必ずその問題に対する解決策を求めることになる。鉄道安全の問題において、民衆自体が鉄道建設時の様々な安全のリスクを直接解決することは難しいが、その問題から生じる不安に対しては、民衆がその不安を解釈し、町や自らの日常生活への影響を軽減するための「解釈」を行うことができる。このような解釈は、現在日本の各鉄道踏切の隣にある地蔵に見られる。本研究では、これらの地蔵を「踏切の地蔵」と名付けている。地蔵尊の名前は異なるものの、これらの地蔵は、同じ問題を解釈するために民衆が利用している。また、問題を解釈する際に、多様な機能が柔軟に付与され、様々な要求に対応している。つまり、地蔵は固定する信仰の対象としてのみ存在するのではなく、問題を解釈するための「もの」として扱われている。本研究で取り上げた例では、鉄道事故や自殺を「異常死」と見なし、地蔵は六道の救済の存在として、その能力を利用して、これらの異常死者たちを鎮魂・救済・供養する最も多くの機能として示されている。さらに、調査によれば、これらの地蔵は魔除けや厄除けの役割も果たしており、これは研究で取り上げられている「魔の踏切」という言葉の出現と関連している。民衆が事故の原因に対する解釈における、異常死者たちを鎮魂・供養するとの関連性を示している。また、多くの踏切の地蔵は死者の遺族だけではなく、事故の発生地町内会、商店会、婦人会、地元の有志が共同で建立し、維持している。さらに、一部の地蔵の看板には、これらの地蔵が町内の交通安全を守護していると記載されており、これは地域全体が地蔵を利用して、町内住民の不安を解消しているといえる。最後に、踏切地蔵は危険の記憶装置として、人々に踏切の危険性に注意を喚起すると同時に、過去の悲惨な歴史を伝える機能を持っている。

他方、これらの地蔵は複数の機能が関連して存在している。前述した通り、この踏切は「魔の踏切」と称され、その「魔」を払うために建立された魔除地蔵や厄除地蔵が存在する。また、これらの地蔵には死者の供養及び交通安全の祈願という機能も備わっている。これらの機能は偶然に付与されたものではない。踏切における「魔」の存在が原因で事故が頻発する、その「魔」は、事故死は異常死に分類され、事故に遭遇した死者の怨霊が事故現場にとどまり、更なる祟りを起こして事故を誘発するとされる。すなわち、これら踏切事故における死者も「魔」の一形態と見なされる可能性がある。中世から伝わる死者救済の地蔵を利用して死者を供養し、怨霊を鎮めて踏切事故を解消している。死者が供養されることで「魔」が消失し、事故が減少することで、通行人の交通安全が保障される。

一方、地元住民にとって踏切地蔵の機能は、新しい交通空間である「踏切」が存在する問題に対応するために生み出されたものである。この空間の問題が人々の日常生活に影響を与え始めた時、民衆の第一の反応は、自身のこれまでの生活経験を利用して問題を緩和することだった。その後、問題がより明確になるにつれて、これらの経験も適時に更新され、より効果的に問題を解決するために変化している。

以上をまとめると、近代鉄道の大規模建設とその利用と共に、鉄道事故や列車を利用した自殺による死者数が増加してゆく。これらの死は通常の死とは異なり、「異常死」と呼ばれている。この異常死は、交通安全への不安や疑問を民衆の中に生み出している。日常生活におけるこのような不安は民衆にとって大きな社会問題となっている。これらの不安を緩和するため、民衆は過去の経験や当時の社会文化を取り入れ、この不安に対する解釈を形成した。この解釈は、鉄道に関連した轢死を起点とする「民俗」の一種と考えられる。本研究は「魔の踏切」という言葉を分析し、同時代の新聞資料と組み合わせることで、当時の人々が鉄道や鉄道安全に対して抱いていた不安を明らかにした。さらに、各地に存在する踏切の地蔵は、日本の民衆がこの不安を解消するための全国的な共通の手段であると考えられている。この方法は、かつての民俗社会から受け継がれた文化と現在の社会背景を組み合わせる新しい社会問題に対応している。これは、民俗文化をどのように使用し、創出するのかを示すものである。

注

- (1) 「偽汽車」という言葉は佐々木喜善の『東奥異聞』に最初に登場した。この怪談は明治 20～22 年の間に登場し、明治末に広く流行した。この怪談の内容は、タヌキやキツネが列車（偽汽車）になって本物の列車と衝突したが、衝突した瞬間に消えた、その後鉄道員や車掌が検査に来たとき、線路上でタヌキやキツネの死骸が発見されたというものである。
- (2) 「魔の踏切」の内容と同じか、事故発生する原因は「死神」がいると説明した怪談である。
- (3) 日本国語大辞典 ジャパンナレッジ <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=200203e84ac4ghiL4Od5> (2023. 12. 02 閲覧)
- (4) 国土交通省用語集 <https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8231974/www.mlit.go.jp/term/file000001.html#a> (2023. 12. 02 閲覧)
- (5) 国土交通省 2018 「平成 30 年版土地白書 第 1 部第 2 章 明治期からの我が国における土地をめぐる状況の変化と土地政策の変遷」 <https://www.mlit.go.jp/common/001248318.pdf> (2023. 12. 15 閲覧)
- (6) 桑園延命地蔵尊 ホームページ <https://soenjizo.kasajizo.com/> (2023. 11. 16 閲覧)

- (7) 八兵衛信仰とは静岡県内に存在する信仰で、その八兵衛は、現存する文献資料や碑文によれば「川中島八兵衛」と全名で呼ばれている。一般に、疫病が流行した際に加持・祈禱を行い、疫病を退散させ平癒させると信じられている。八兵衛信仰に関しては、いくつかの研究者が研究を行っており、静岡県内の各地には慰霊碑や文献資料も存在する。しかし、その出身、職業、時代、および信仰の具体的な内容については、今日に至るまで完全には解明されておらず、各資料や研究のインタビューには矛盾も存在している。
- (8) この怪談は、稲川淳二の友人が国立駅近くの踏切を車で通過している際、突然車が踏切の真ん中で停止した。みんなが慌てて車から降りて押し出そうとしたところ、車のエンジンが再び動き出した。その後、この踏切で事故が頻発していることを聞き、稲川はカメラを持って、事故が発生する時間帯に踏切で撮影を行った。そして、電車が通過する時に女性の地縛霊の写真を撮影したという。
- (9) YouTube 公開ビデオ：国分寺ふんじぞう祭り サンバカーニバル／納涼チビッコ祭 <https://www.youtube.com/watch?v=2HZkOqDpmLs> (2023. 12. 03 閲覧)
- (10) 前に説明した、この記憶は集団的、共同性の記憶である。

参考文献

- トッアン, Y. 1993 『空間の経験——身体から都市へ』 山本浩訳、筑摩書房
- 池澤優 2010 「はじめに——非業の死者、大量死の死者、戦争死者の記憶と政治性」池澤優・ブッシィ, A.『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティックス』 秋山書店
- 石川純一郎 1995 『地蔵の世界』 時事通信社
- 一柳廣孝 2017 「怪談を束ねる——明治後期の新聞連載記事を中心に」『口承文藝研究』(40): 155-163
- 運転保安研究会 1981 『鉄道の運転と安全のしくみ——運転保安ハンドブック』 日本鉄道運転協会
- 及川祥平 2023 『心霊スポット考——現代における怪異譚の実態』 アーツアンドクラフツ
- 大島建彦 1992 『道祖神と地蔵』 三弥井書店
- 金原寛 1980 『ふるさとのおゆみ——焼津市五ヶ堀之内公会堂新築落成記念』
- 小松和彦編 2006 『怪異・妖怪百物語——異界の杜への誘い——』 明治書院
- 笹井子之 1991 『桑園延命地蔵尊由来史——交通安全加護の日本一巨大の地蔵尊』 桑園延命地蔵尊保存会
- 札幌市教育委員会 1997 『新札幌市史 第4巻 通史4』 札幌市
- 清水邦彦 2023 『お地蔵さんと日本人』 法蔵館
- 田中貢太郎 2017 『日本怪談実話(全)』 河出書房新社
- 長沢利明 2019 『江戸東京の庶民信仰』 講談社
- 中根富三郎 2002 『武豊町内地蔵巡り案内』 知多市
- 波平恵美子 2006 「非業の死とその受容——新たな「死の文化」の創出」『死生学研究』(8): 355-362
- 西枇杷島町 1984 『にしびの文化財第2集 神社・仏閣』
- 野村典彦 2011 『鉄道と旅する身体近代 民謡・伝説からディスカバー・ジャパンへ』 青弓社
- 府川松太郎 1986 『追分今昔記』 追分羊かん
- 三吉朋十 1972 『武蔵野の地蔵尊 都内編』 有峰書店
- 焼津市史編さん委員会編 2007 『焼津市史 民俗編』: 554
- 吉田裕 2016 「国有鉄道時代における鉄道事故の研究：ヒューマンファクターの視点から」 関西大学博士学位論文

地蔵と関連資料

図集

図集の説明及び図例：

この図集は、本研究で挙げられた地蔵の写真を収録している。

本図集の大部分の写真は筆者が撮影したため、図集内での個別の説明は省略する。一方、地元の資料館や市役所の協力を得たものも含まれており、これらの写真については関連する出典を明記する。

本図集の図は以下の図例のようになる。

図例 1

② 東京都



写真2 発心地蔵菩薩 地蔵尊本体 正面

本研究で挙げられた地蔵及びそれに関連する資料

① 北海道

1. 桑園延命地蔵



写真1 桑園延命地蔵 正面（写真は桑園延命地蔵保存会提供）

② 東京

1. 発心地蔵菩薩



写真2 発心地蔵菩薩 地蔵尊本体 正面



写真3 発心地蔵菩薩 地蔵堂 正面



写真4 発心地蔵菩薩 地藏尊本体 裏側



写真5 発心地蔵菩薩 地藏尊由来看板(新)

2. 交通厄除地藏尊



写真6 交通厄除地藏尊 地藏堂 正面



写真7 交通厄除地藏尊 地藏堂左側 1



写真8 交通厄除地藏尊 地藏堂左側 2



写真9 交通厄除地藏尊 地藏堂右側 1



写真10 交通厄除地藏尊 地藏堂右側 2



写真11 交通厄除地藏尊 交通安全無事を祈る南無観世音菩薩 正面



写真 12 交通厄除地藏尊 交通事故死亡者供養塔

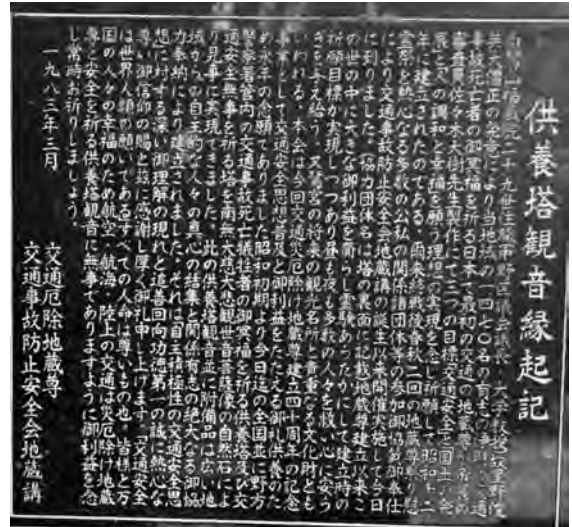


写真 13 交通厄除地藏尊 供養塔観音縁起記

3. おまもり地藏尊



写真 14 おまもり地藏尊 地藏尊本体 正面



写真 15 おまもり地藏尊 地藏尊本体 左側



写真16 おまもり地蔵尊 地蔵尊本体 台座（おまもり地蔵尊）



写真17 おまもり地蔵尊 地蔵尊由来看板（文字はp.136に記載）

4. 梅丘延命地蔵



写真18 梅丘延命地蔵 地蔵堂 正面

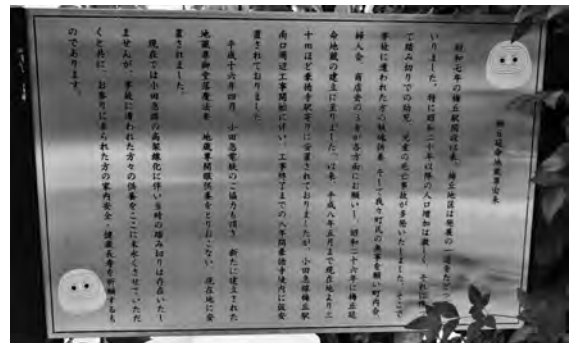


写真19 梅丘延命地蔵 地蔵由来看板

5. 栄町延命地藏



写真 20 栄町延命地藏 地藏堂全体 正面



写真 21 栄町延命地藏 地藏堂 左側 延命地藏 正面



写真 22 栄町延命地藏 地藏堂 右側 無名地藏 二つ 正面



写真 23 栄町延命地藏 延命地藏地藏堂内 昔の写真

6. 国分寺延命地藏



写真 24 栄町延命地藏 延命地藏地藏堂内 延命地藏由来看板



写真 25 国分寺延命地藏 地藏本体 正面

7. 久我山交通安全地藏

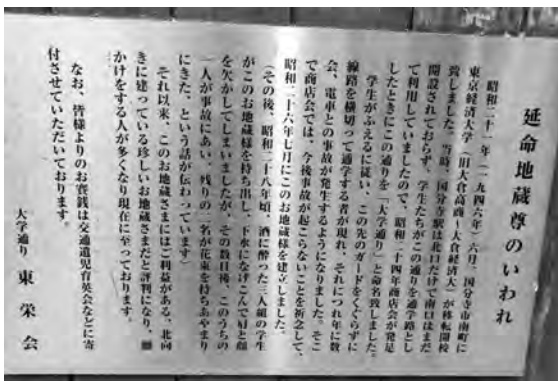


写真 26 国分寺延命地藏 地藏尊由来看板



写真 27 久我山交通安全地藏 地藏尊本体 正面



写真 28 久我山交通安全地藏 地藏尊本体 左側

③ 神奈川

1. 塚越地藏、交通安全地藏



写真 29 塚越地藏、交通安全地藏 正面



写真 30 塚越地藏 地藏本体 正面



写真 31 塚越地蔵 地蔵台座 正面



写真 32 交通安全地蔵 正面

2. 花月地蔵尊



写真 33 交通安全地蔵 台座



写真 34 花月地蔵尊 地蔵尊本体 正面



写真 35 花月地蔵尊 地蔵尊本体 右側



写真 36 花月地蔵尊 地蔵尊本体 左側



写真 37 花月地蔵尊 地蔵尊由来看板



写真 38 花月地蔵尊 地蔵銘板

3. 鵜沼海岸地藏尊



写真 39 花月地藏尊 発起人銘板



写真 40 鵜沼海岸地藏尊 地藏尊本体 正面



写真 41 鵜沼海岸地藏尊 地藏尊台座 正面



写真 42 鵜沼海岸地藏尊 地藏尊台座 右側

4. 松田町厄除地藏尊



写真 43 鵜沼海岸地蔵尊 地蔵尊由来看板



写真 44 松田町厄除地蔵尊 地蔵尊位置



写真 45 松田町厄除地蔵尊 地蔵尊本体 正面

④ 静岡

1. 二本塚厄除地藏尊



写真 46 二本塚厄除地藏尊 地藏尊本体 正面



写真 47 二本塚厄除地藏尊 地藏尊由来看板

2. 五ヶ堀踏切地藏尊



写真 48 五ヶ堀踏切地藏尊 地藏尊本体 正面



写真 49 五ヶ堀踏切地藏尊 地藏尊由来看板



写真 50 五ヶ堀踏切地藏尊 川中島八兵衛之墓 正面

⑤ 愛知

1. ニッ杵駅踏切地藏



写真 51 ニッ杵駅踏切地藏 地藏尊本体 正面



写真 52 ニッ杵駅踏切地藏 地藏尊本体 左側

2. 踏切地藏堂



写真 53 ニッ杵駅踏切地藏 地藏尊本体 裏側



写真 54 踏切地藏堂 地藏堂全体 正面



写真 55 踏切地藏堂 銘柱（左側に「昭和九年四月再建」と書かれている）



写真 56 踏切地藏堂 石川太郎観音菩薩像
（はくリュウ大神の由来は不明）



写真 57 踏切地藏堂 地藏 1



写真 58 踏切地藏堂 地藏 2



写真 59 踏切地藏堂 地藏 3



写真 60 踏切地藏堂 地藏 4

3. 交通安全地藏、身代り地藏



写真 61 踏切地蔵堂 地蔵 5-8



写真 62 身代り地蔵 地蔵本体 正面（武豊町教育委員会生涯学習課歴史民俗資料館提供）



写真 63 身代り地蔵 地蔵台座 地蔵由来（武豊町教育委員会生涯学習課歴史民俗資料館提供）



写真 64 身代り地蔵 地蔵台座 裏側（武豊町教育委員会生涯学習課歴史民俗資料館提供）



写真 65 交通安全地藏 地藏本体 正面（武豊町教育委員会生涯学習課歴史民俗資料館提供）

⑥ 大阪

1. 魔除地藏尊



写真 66 魔除地藏尊 地藏本体 正面



写真 67 魔除地藏尊 地藏本体 右側

2. 子安地藏尊



写真 68 魔除地藏尊 地藏本体 裏側



写真 69 子安地藏尊 地藏堂 正面